

8
士師
聖徒伝 74

「神の憐れみを あなどるな」

士師記15～16章 サムソン・後半

【今日のアウトライン】

0. イントロダクション

I. サムソンのたたかい 15章

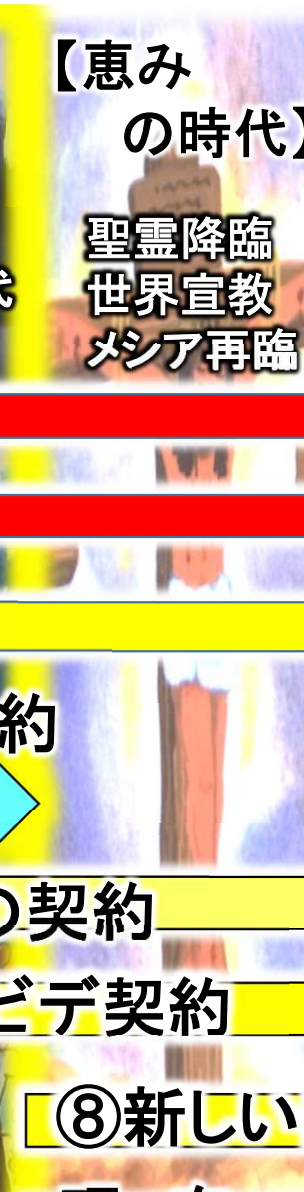
II. サムソンの最期 16章

III. まとめと適用

神の憐れみによる信仰者
ただ主を信頼する者になろう



ユダの山地



【無垢の時代】

【良心の時代】

【人類統治の時代】

【約束の時代】

【律法の時代】

【恵みの時代】

【御国の時代】

天地創造

墮罪
~大洪水

バベルの塔事件

アブラハム
~ヤコブ

イスラエル
王国時代
メシア初臨

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

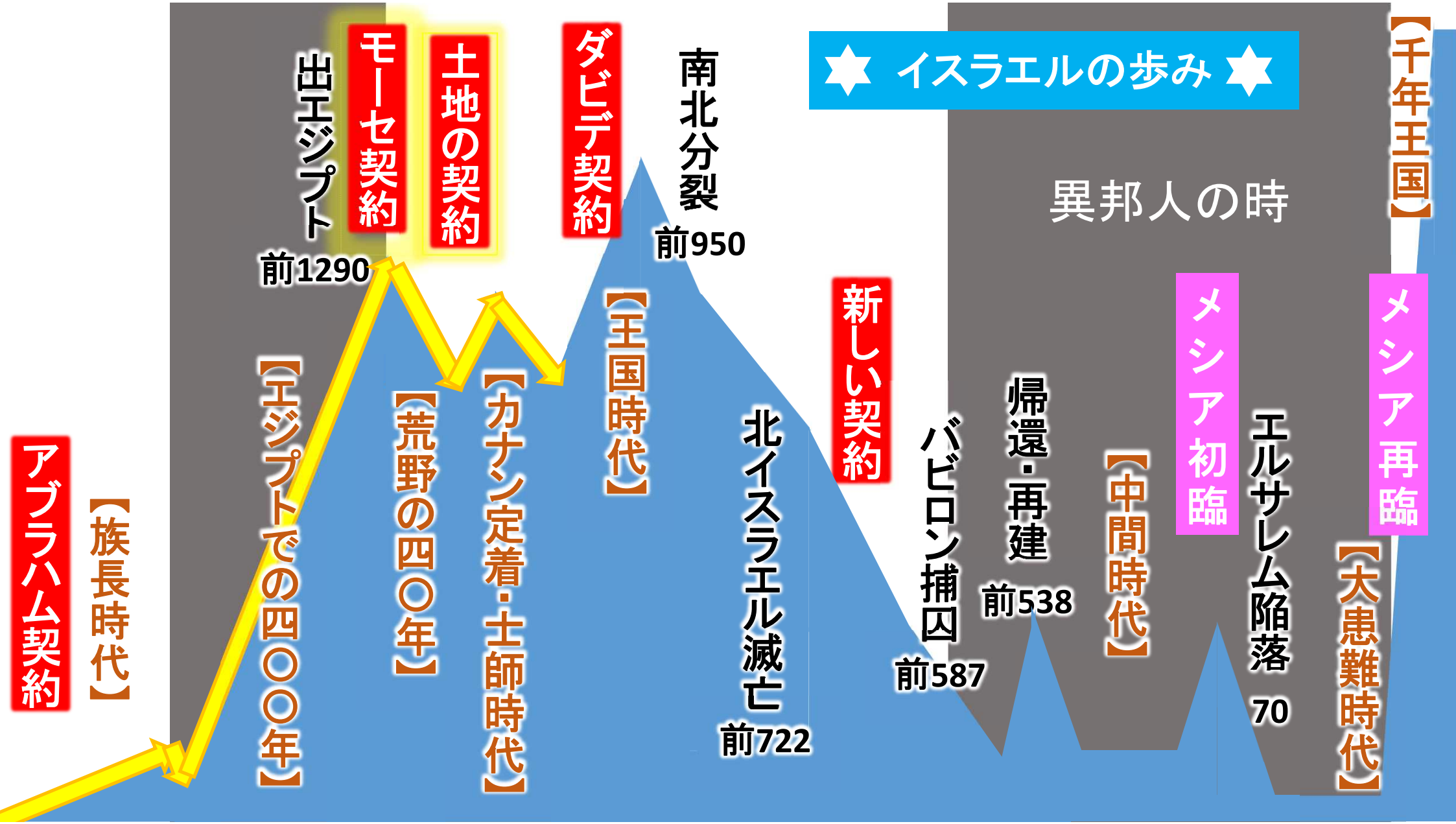
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

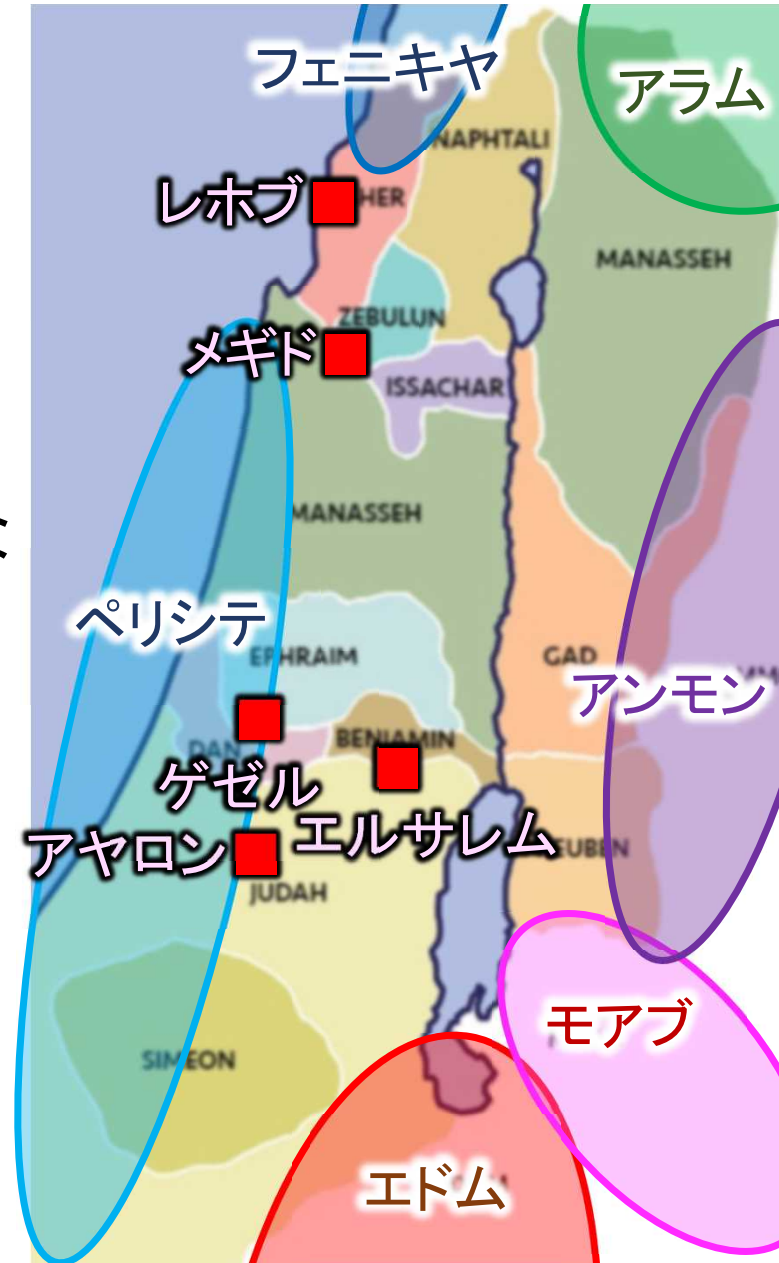
未来

★ イスラエルの歩み ★



【士師の時代・残された土地】

- ヨシュアに率いられたイスラエルは、12部族それぞれの相続地を手に入れた。
- しかし、未征服の地がまだ多く残っていた。
- カナン人の町が要所にあり、周囲にも、強力な民族がいて、イスラエルを脅かしていた。
- イスラエルが背教し、異民族に苦しめられ、悔い改めて主に助けを求めると、主は、士師を立て、敵を撃退された。
- 士師は、あくまで一部族のリーダー。全イスラエルを治める王は、まだいなかった。



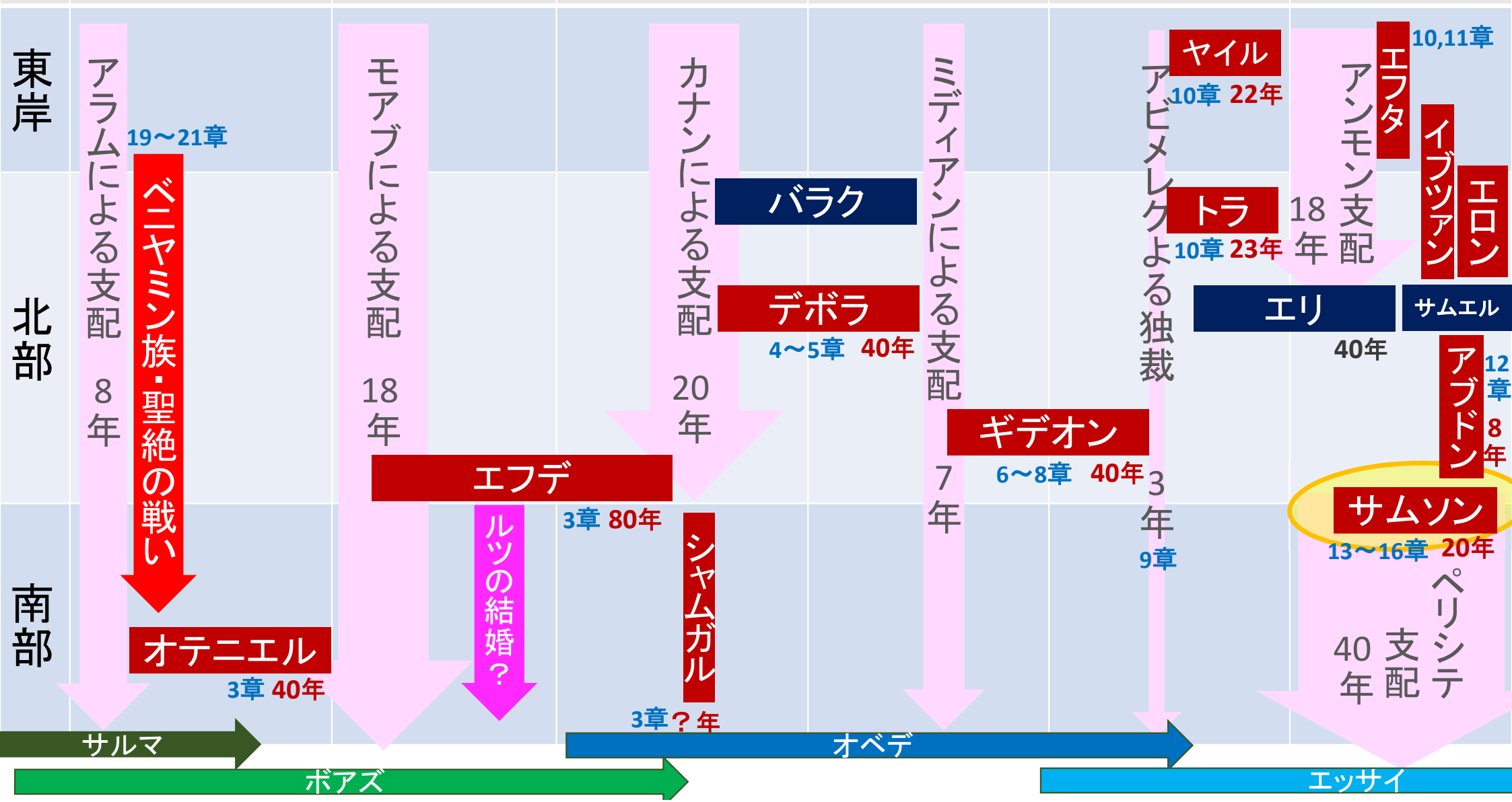
士師	聖書	出身部族	敵
①オテニエル	3:7～11	ユダ	アラム人
②エフデ	3:12～30	ベニヤミン	モアブ人
③シャムガル	3:31	?	ペリシテ人
④デボラ	4:1～5:31	エフライム	カナン人
⑤ギデオン	6:1～8:32	マナセ	ミディアン人
⑥トラ	10:1～2	イッサカル	?
⑦ヤイル	10:3～5	マナセ(ギルアデ)	?
⑧エフタ	10:6～11:40	マナセ(ギルアデ)	アンモン人
⑨イプツァン	12:8～10	ゼブルン	?
⑩エロン	12:11～12	ゼブルン	?
⑪アブドン	12:13～15	エフライム	?
⑫サムソン	13:1～16:31	ダン	ペリシテ人



【士師の時代】

BC1200

BC1100



【二方面からの異民族による裁き】 士師10:7

【主】の怒りはイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをペリシテ人の手とアンモン人の手に売り渡された。

■ 士師時代の最後にイスラエルを蹂躪した二部族。

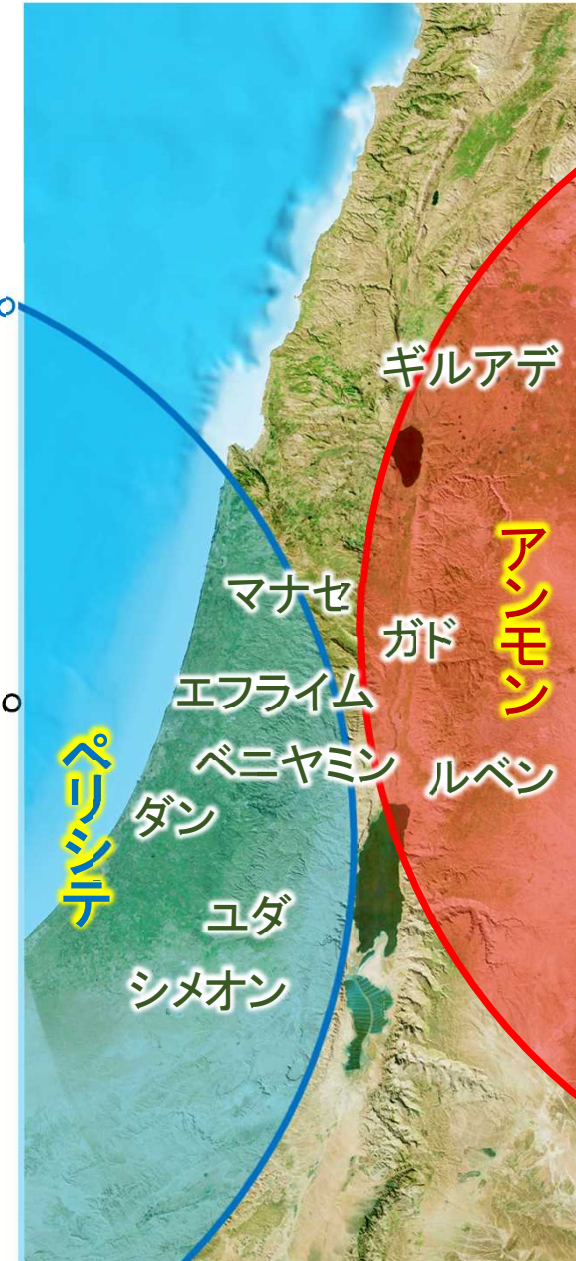
① ヨルダン川東岸ではアンモン人

...アブラハムの甥ロトの子孫。➡士師エフタが対決。

② 地中海沿いではペリシテ人

...高度な文明と強大な軍事力を誇る海洋民族。

➡ダン族の士師サムソンが対決



【士師の時代のイスラエルの惨状】

- 初期にベニヤミン族が聖絶。生き残りはわずか。
➡ その子孫に登場するのが、士師エフデ。
- ヨルダン川東岸中部にいたはずのガド族は、一度も登場せず。➡ 異邦の支配が苛烈？
- 後期、エフライム族は、エフタとの戦いで42,000人が虐殺。主力部隊は全滅。
➡ ヨシュアの時代の人口が、32,500人。
- ダン族は、初期に、多数が最北部へ移住。

指導者に、ふさわしいとはいえない士師たち。
罪を繰り返し、悪化していくイスラエル



【12番目の士師サムソン】 13～14章のあらすじ

■ ダン族本来の相続地、山あいのティムナの町で、マノアの子として生まれた。

■ 生まれながらに、神に誓願を立てたナジル人。
ぶどう酒を断ち、汚れた死体に触れず、
髪を切らないことが、ナジル人の証明だった。

■ 聖霊により、ライオンを素手で倒すほどの怪力を
与えられたが、サムソンの信仰には問題が...

■ 汚れた死体に触れ、律法を破っても平気だった。



【サムソンの結婚】

- サムソンは、平地の町ティムナで、敵対するペリシテ人の娘を見初め、両親の反対を押し切って結婚した。
- 不穏な雰囲気での婚宴で、サムソンは、ペリシテ人の30人の客人に、誰にも分からない謎かけをする。
- 客人は、サムソンの妻を脅し、答えを聞き出させた。
- 怒ったサムソンは、謎かけの賞品晴れ着を手に入れるため、ペリシテ人の町を襲い、客人に投げ与えた。
- 一方、妻の父親は、勝手に破談と判断し、客人の一人に、娘を妻として与えてしまった。



I. サムソンのたたかい

士師記15章

ユダの溪谷



【ティムナへの再訪】 士師15:1～3

しばらくたって、小麦の刈り入れの時に、サムソンは子やぎを一匹持って自分の妻を訪ね*、「私の妻の部屋に入りたい」と言ったが、彼女の父は入らせなかった。

* 通い婚の慣習。

■ 妻は、他の男のものになっており、父は、妹を嫁がせようとした。花嫁料が巻き上げられただけ。

15:3 サムソンは彼らに言った。「今度、私がペリシテ人に害を加えても、私は潔白だ。」



現在のティムナ

【サムソンの復讐】 士師15:4～6

それからサムソンは出て行って、ジャッカル*を三百匹捕らえた。そして、たいまつを取り、尾と尾をつなぎ合わせて、二本の尾の間にそれぞれ一本のたいまつをくり付けた。彼はそのたいまつに火をつけ、それらのジャッカルをペリシテ人の麦畑の中に放し、束ねて積んである麦から、立ち穂、オリーブ畑に至るまで燃やした。

* ジャッカル (野狂・やかん) ...群れで生息する。

■ サムソンの復讐の理由を知ったペリシテ人たちは、ティムナの妻と父を焼き殺してしまった。



ジャッカル

【さらなるサムソンの復讐】 士師15:7～8

サムソンは彼らに言った。「おまえたちがこういうことをするなら、私は必ずおまえたちに復讐する。その後で、私は手を引こう。」

サムソンは彼らの足腰を打って、大きな打撃を与えた。それから、彼は下って行って、エタム*の岩の裂け目に住んだ。

* 岩だらけの地形を指す言葉。

...南王国時代には要塞が築かれた(Ⅱ歴11:6)

■サムソンは、天然の要塞を拠点に活動した。

➡主の決めた、ダン族の相続地を離れて...



ユダの岸壁の洞窟

【ユダ族の凋落】 士師15:9～10

- サムソンに手を焼いたペリシテ人は、直接対決を避け、ユダに軍を送り、レヒの町を侵略した。
- 侵略の理由を知ったユダの人々3千人が、サムソンを訪れ、「われわれの支配者」であるペリシテに逆らったことを問いただした。
- サムソンはユダとの戦いを避け、彼らに従い、ペリシテ人に引き渡されることを同意した。
「こうして、彼らは二本の新しい綱で彼を縛り、その岩から彼を引き上げた。」
- メシアの系図を継ぐユダ族の信仰の墮落ぶり。
➡サムソンの方がまだ主への信仰を保っていた。

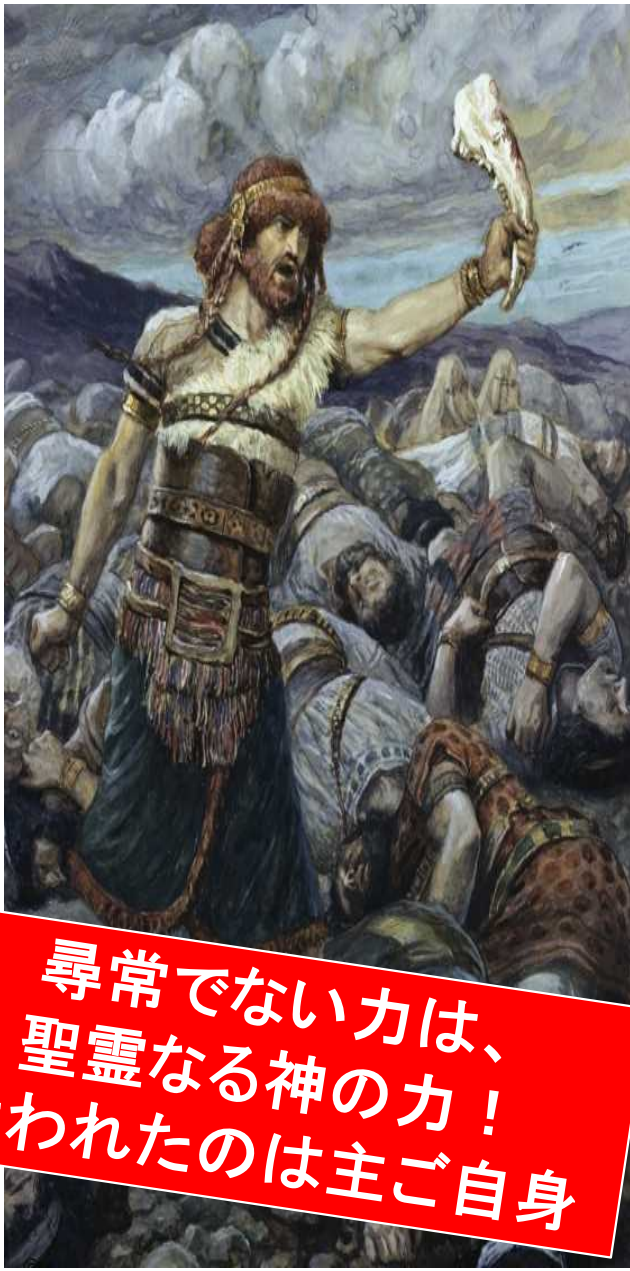
真の支配者を離れ、
異教徒に従属!!



【レヒでのたたかい】 士師15:14～17

サムソンがレヒに来たとき、ペリシテ人は大声をあげて彼に近づいた。すると、【主】の霊が激しく彼の上になり、彼の腕に掛かっていた綱は火のついた亜麻糸のようになって、その縄目が手から解け落ちた。サムソンは真新しいろばのあご骨*を見つけ、手を伸ばして取り、それで千人を打ち殺した。サムソンは言った。「ろばのあご骨で、山と積み上げた。ろばのあご骨で、千人を打ち殺した。」 こう言い終わると、彼はそのあご骨を投げ捨てた。彼はその場所を、ラマテ・レヒ(あご骨の高台)と名づけた。

* これも、死体に触れる律法違反では？



尋常でない力は、
聖霊なる神の力！
戦われたのは主ご自身

【乾きを覚えるサムソン】 士師15:18～20


そのとき、彼はひどく渴きを覚え、【主】を呼び求めて言った。*

「あなたは、しもべの手で、この大きな救いを与えてくださいました。しかし今、私は喉が渴いて死にそう
で、無割礼の者どもの手に落ちようとしています。」
すると、神はレヒにあるくぼんだ地を裂かれたので、
そこから水が出た。サムソンは水を飲んで元気を
回復し、生き返った。それゆえ、その名はエン・ハ・
コレ(呼ばれる者の泉)と呼ばれた。それは今日もレ
ヒにある。こうして、サムソンはペリシテ人の時代
に二十年間イスラエルをさばいた。

*** 主に呼び求めるサムソンの姿は、ここが初!!**



窮地に至って初めて
主に求めたサムソン



主を忘れれば、すぐ
に枯渴する私たち。
主を慕い求め続けて
いるだろうか？

Ⅱ. サムソンの最期

士師記16章

ユダの山地・西部



【ガザでのサムソン】 士師16:1～3

サムソンはガザへ行き、そこで遊女を見つけて、彼女のところに入った。「サムソンがここにやって来た」と、ガザの人々に告げる者があったので、彼らはそこを取り囲み、町の門で一晩中、彼を待ち伏せた。彼らは「明け方まで待ち、彼を殺そう」と言って、一晩中鳴りを潜めていた。

サムソンは真夜中まで寝ていたが、真夜中に起き上がり、町の門の扉と二本の門柱をつかんで、かんぬきごと引き抜き、それを肩に担いで、ヘブロンに面する山の頂に運んで行った。

* ガザ ...ペリシテの最南端の都市。二日の距離。

■ 多くの恵みを受けながら、信仰の幼子のままのサムソン

主の恵みをむさぼりながら
離れていく一方のサムソン



【破滅への序曲】 士師16:4～9

その後、サムソンは、ソレクの谷*にいる女を愛した。彼女の名はデリラといった。

(* あのティムナのある一帯。)

■ 最初の過ちを悪化して繰り返していくサムソン

- 1 町に下り、ペリシテ人の女に惚れ込む。
- 2 罪を犯す。罪とたわむれ、罪をもてあそぶ。
- 3 女に言い立てられて、秘密を明かす。

■ ナジル人の誓願のうち、死体に触れるなという命令はすでに破っていた。ぶどう酒も飲んでいたら？
頭に剃刀をあてるなという禁令は守っていたが...



【ペリシテ人とデリラの取引】 士師16:5~7

- サムソンの女への弱さは知られていたのだろう。ペリシテ人の5人の領主たちは、一人当たり銀千百枚と引き換えに、デリラに、サムソンの力を断つ方法を聞き出すよう促した。

16:6 そこで、デリラはサムソンに言った。「どうか私に教えてください。あなたの強い力はどこにあるのですか。どうすればあなたを縛って苦しめることができるのでしょうか。」

16:7 サムソンは言った。「もし、まだ干していない七本*の新しい弓の弦で私を縛るなら、私は弱くなり、並みの人のようになるだろう。」

(* サムソンの髪は、七房に束ねられていた。)



【サムソンの霊的戦い】 士師16:8～9

そこで、ペリシテ人の領主たちは、干していない七本の新しい弓の弦を彼女のところに持って来たので、彼女はそれでサムソンを縛り上げた。

彼女は、待ち伏せる者を奥の部屋に置いておき、「サムソン、ペリシテ人があなたを襲って来ます」と言った。しかし、サムソンはまるで麻の撚り糸が火に触れて切れるように、弓の弦を断ち切った。こうして、彼の力の源は知られなかった。

- 力の源は、髪ではなく、神への信仰。かろうじて残った一片の信仰を守り通せるかどうか。



霊的戦いの本質を
霊的幼子サムソンは
わかっているか？

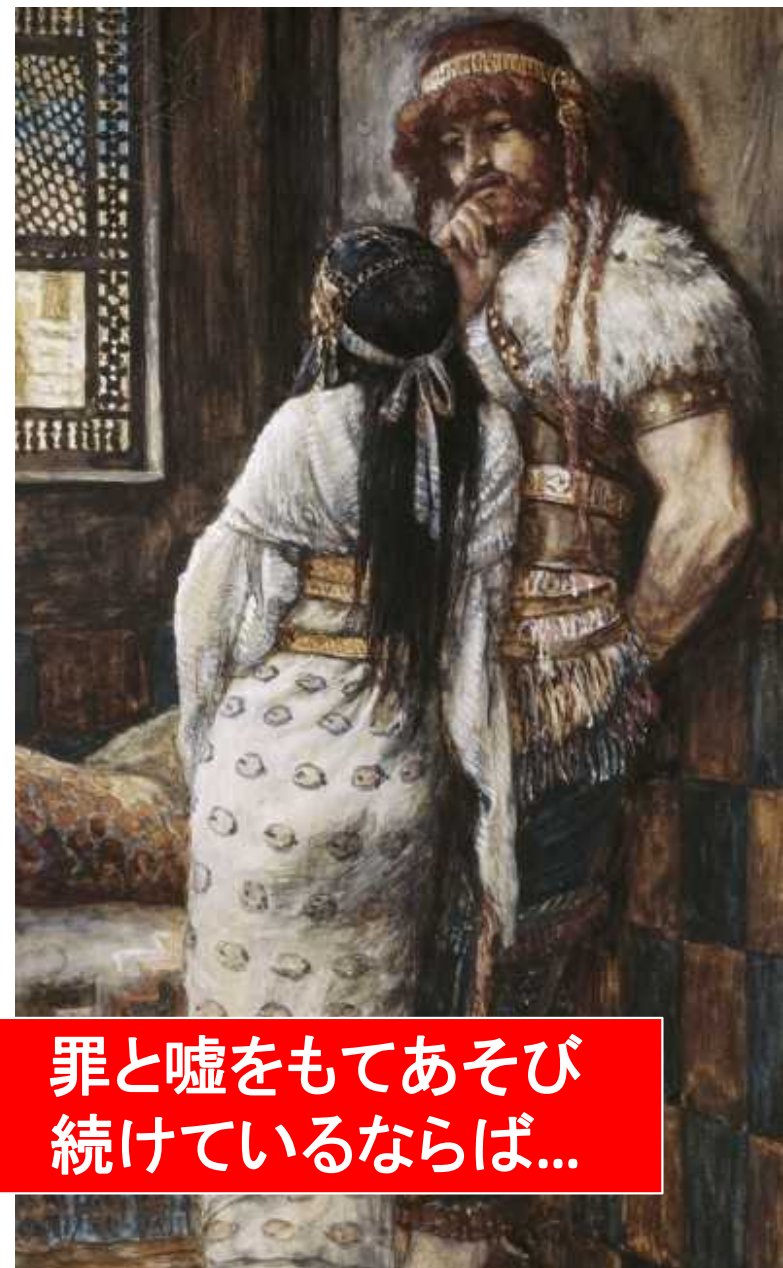
【二度目のやりとり】 士師16:10～12

デリラはサムソンに言った。「まあ、あなたは私をだまして嘘をつきましたね。今度こそ、どうしたらあなたを縛れるか教えてください。」

サムソンは言った。「もし、**仕事に使ったことのない新しい綱**で、私をしっかり縛るなら、私は弱くなり、並みの人のようになるだろう。」

そこで、デリラは新しい綱を取って、それで彼を縛り、「サムソン、ペリシテ人があなたを襲って来ます」と言った。奥の部屋には待ち伏せしている者がいた。しかし、サムソンは腕からその綱を、糸のように断ち切った。

* サムソンの髪は、剃られたことがない。
嘘の中にも散りばめられる、ヒントの危うさ。



罪と嘘をもてあそび
続けているならば...

【三度目のやりとり】 士師16:13～14

デリラは、またサムソンに言った。「今まで、あなたは私をだまして嘘をついてきました。どうしたらあなたを縛れるか、私に教えてください。」サムソンは、「もしおまえが機の経糸と一緒に私の髪の毛七房*を織り込み、機のおさで締めつけておくならば」と言った。

彼女は機のおさで締めつけて言った。「サムソン、ペリシテ人があなたを襲って来ます。」すると、サムソンは眠りから覚めて、機のおさと機の経糸を引き抜いた。

*** ついに核心の髪に触れてきた!!**



【追い詰められるサムソン】 士師16:15～16

彼女はサムソンに言った。「あなたの心が私にはないのに、どうして『おまえを愛している』と言えるのでしょうか。あなたはこれで三回も私をだまして、あなたの強い力がどこにあるのか教えてくださいませんでした。」

こうして、毎日彼女が同じことばでしきりにせがみ、責め立てたので、**彼は死ぬほど辛かった。**

- 自分の嘘は棚に上げ、容赦なく責めるデリラ。
手段を選ばぬ支配的な性質がよく現れている。
- 次第に精神的に追い詰められていくサムソン。
➔ **罪に対して、罪で対抗しようとする愚かさ。**



イゼベル級の悪女?!

【陥落】 士師16:17～18

ついにサムソンは、自分の心をすべて彼女に明かして言った。「私の頭には、かみそりが当てられたことがない。私は母の胎にいたときから神に献げられたナジル人だからだ。もし私の髪の毛が剃り落とされたら、私の力は私から去り、私は弱くなって普通の人のようになるだろう。」

16:18 デリラは、サムソンが自分の心をすべて明かしたことが分かったので、こう言って、人を遣わし、ペリシテ人の領主たちを呼び寄せた。「今度こそ上って来てください。サムソンは心をすべて私に明かしました。」ペリシテ人の領主たちは、彼女のところに上って来たとき、その手に銀を持って来た。



ついにデリラの手に
墮ちたサムソン

心までも、悪に
明け渡してしまった。

【地に落ちたサムソンの栄誉】 士師16:19～21

彼女は膝の上でサムソンを眠らせ、人を呼んで彼の髪の毛七房を剃り落とさせた。彼女は彼を苦しめ始め、彼の力は彼を離れた。

彼女が「サムソン、ペリシテ人があなたを襲って来ます」と言ったとき、彼は眠りから覚めて、「今度も前のように出て行って、からだをひとゆすりしてやろう」と言った。彼は、【主】が自分から離れられたことを知らなかった。

ペリシテ人は彼を捕らえ、その両目をえぐり出した。そして彼をガザに引き立てて行って、青銅の足かせを掛けてつないだ。こうしてサムソンは牢の中で臼をひいていた。*

(* 臼をひくのは女性の仕事。サムソンの凋落ぶり。)



律法の時代、聖霊は、
限られた人に、
一時的に降るだけ

【最後のチャンス】 士師16:22～25

しかし、サムソンの髪の毛は、剃り落とされてから
また伸び始めた。

さて、ペリシテ人の領主たちは、自分たちの神ダゴンに盛大ないけにえを献げて楽しもうと集まり、そして言った。「われわれの神は、敵サムソンをわれわれの手に渡してくださった。」

民はサムソンを見たとき、自分たちの神をほめたたえて言った。「われわれの神は、われわれの敵を、われわれの手に渡してくださった。この国を荒らして、われわれ大勢を殺した者を。」

彼らは上機嫌になったとき、「サムソンを呼んで来い。見せ物にしよう」と言って、サムソンを牢から呼び出した。彼は彼らの前で笑いものになった。

信仰の回復を示すもの



【サムソンの祈り】 士師16:25～28

彼らがサムソンを柱の間に立たせたとき、サムソンは自分の手を固く握っている若者に言った。「私の手を放して、この神殿を支えている柱にさわらせ、それに寄りかからせてくれ。」

神殿は男や女でいっぱいであった。ペリシテ人の領主たちもみなそこにいた。屋上にも約三千人の男女がいて、見せ物にされたサムソンを見ていた。

サムソンは【主】を呼び求めて言った。「【神】、主よ、どうか私を心に留めてください。ああ神よ、どうか、もう一度だけ私を強めてください。私の二つの目のために、一度にペリシテ人に復讐したいのです。」

*「【主】、主よ」、ヤハウエ、アドナイと呼びかけた。



若者は、ダゴン神への忠誠心と捉えた？

二度目で最後の主への呼びかけ

【サムソンの最期】 士師16:29～31

サムソンは、神殿を支えている二本の中柱を探り当て、一本に右手を、もう一本に左手を当てて、それで自らを支えた。

サムソンは、「ペリシテ人と一緒に死のう」と言って、力を込めてそれを押し広げた。すると神殿は、その中にいた領主たちとすべての民の上に落ちた。こうして、サムソンが死ぬときに殺した者は、彼が生きている間に殺した者よりも多かった。

彼の身内の者や父の家の者たちがみな下って来て、彼を引き取り、ツォルアとエシュタオルの間にある父マノアの墓に運び上げて葬った。サムソンは二十年間イスラエルをさばいた。

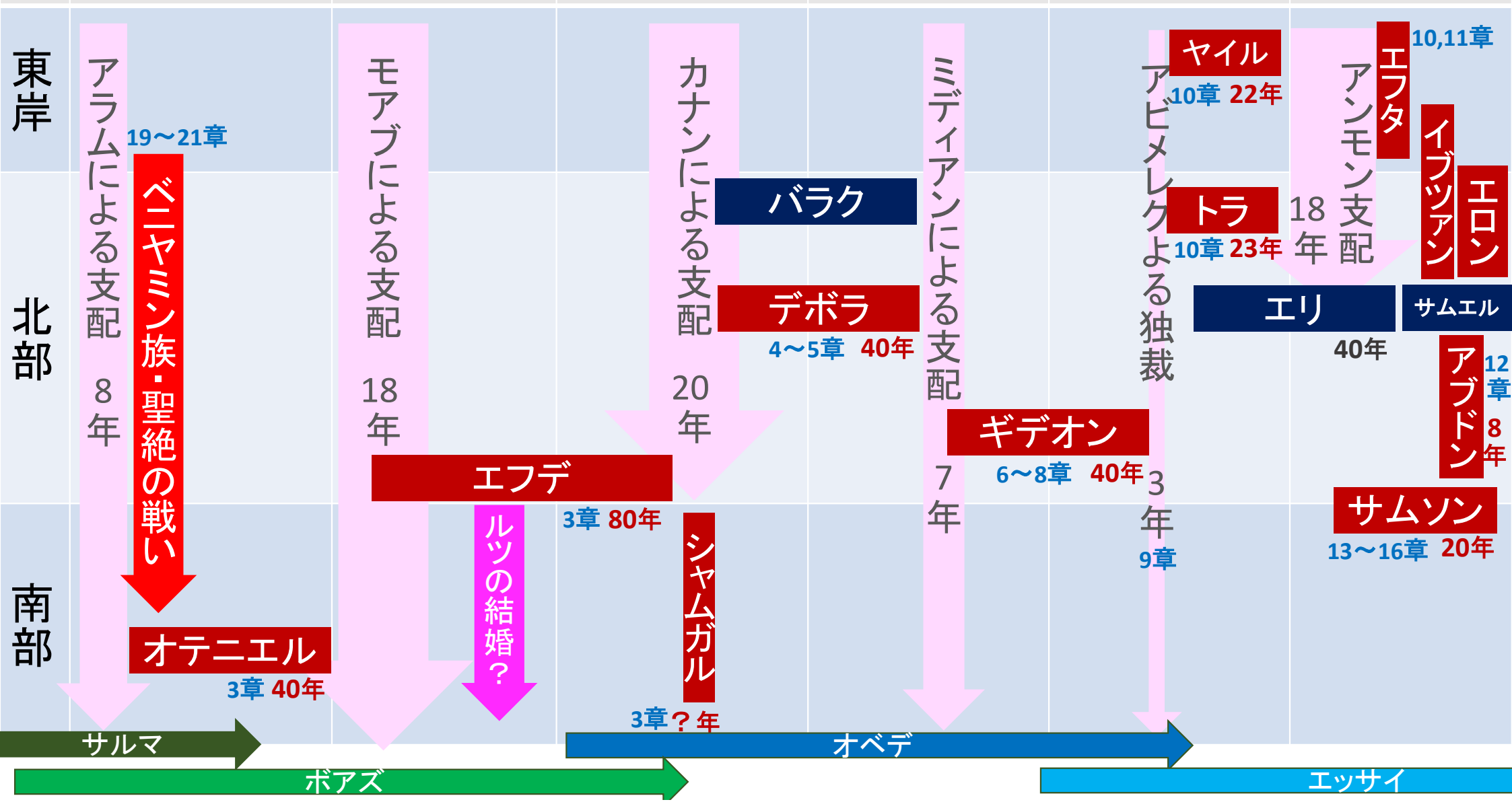


死んで後、ようやく
相続地に戻ったサムソン

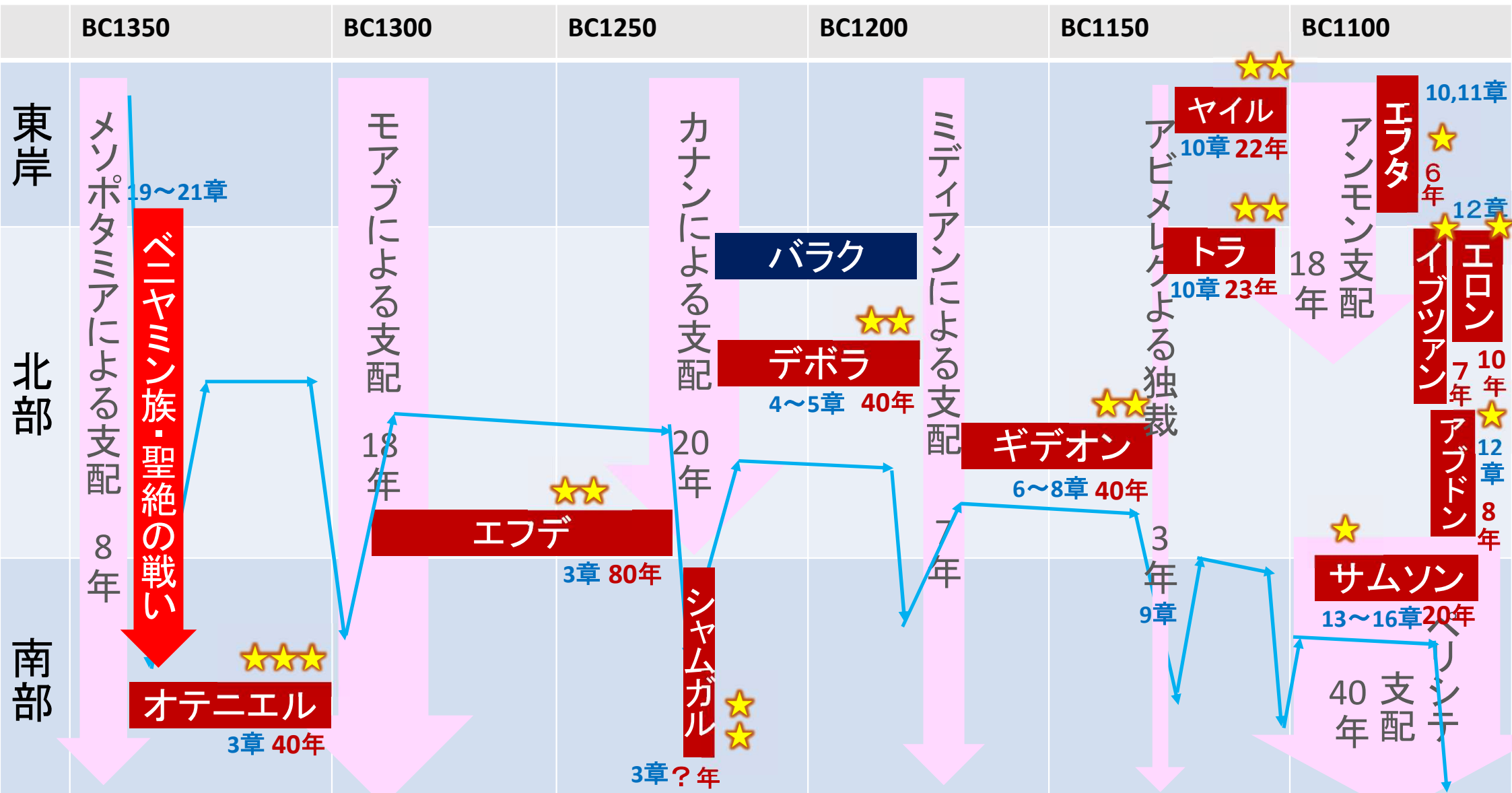
【士師の時代】

BC1200

BC1100



【士師の時代】



Ⅲ. まとめと適用

神の憐れみによる信仰者
ただ主を信頼する者になろう

ガザの畑地

【サムソンは、なぜ力を失ったのか？】

■サムソンは、最初の過ちを繰り返し、悪化させ、破滅を招いた。

- ① 町に下り、ペリシテ人の女に惚れ込む。
- ② 罪を犯す。罪とたわむれ、罪をもてあそぶ。勘違い、驕り。
- ③ 女に言い立てられて、秘密を明かす。

■ナジル人の請願に伴う禁令も、犯し続けていった。

汚れた死体に平気で触れ、ついには、髪もそり落とした。

➡サムソンの力は、髪ではなく、神にあった!! ...かすかに残った意識。

■欲望のままに罪を重ねながらも、一片の信仰がサムソンには残っていた。

しかし、デリラの言うがままに、心までもゆだね、悪に支配されたその時、サムソンに注がれた聖霊は去った。 ➡祝福と呪いが律法の原則。

【それでもなお、サムソンが信仰の人と言われる理由とは？】

★信仰者のリストに名を連ねるサムソン★ ヘブル書11:32～34

「これ以上、何を言いたいでしょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても語れば、時間が足りないでしょう。彼らは信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃を逃れ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を敗走させました。」

■ 神にささげられたナジル人として歩んできたサムソン。

■ 霊的幼子のサムソンに、聖霊が注がれ、力を与えた。

最悪の士師の時代に、それでも数少ない信仰者ではあった。

■ 何より、主が一方的に恵みを注ぎ、サムソンを憐れみ、用いられた。

なぜ主を信じることができたのか。それすら主の恵みだと教えられる。

神の憐れみによる信仰者

【信仰の停滞を打ち破ろう】

- 信仰の成長には、実践が欠かせない。挑戦すれば、失敗もする。
それでもペテロは、主に愛された。求められる、信仰と行いの一致。
- 今の教会時代、福音を信じた者から、聖霊が取り去られることはない。
しかし、信頼して委ねなければ、聖霊は働いてはくださらない。
実践を伴わなければ、いつまでたっても霊的幼子のまま。
- 霊的幼子ほど、形にとらわれて信仰の本質を見失いがち。
髪に力があると思い込んでいたサムソンは、霊的後退に陥っていた。
- まずは、主を呼び求めよう。み言葉を慕い求めることから始めよう。

【信仰者として成長し、信仰の喜びを味わわされていくために】

■サムソンが示した信仰者の最大の資質は、何だろうか？

ヘブル書11:34によれば、「**弱い者なのに強くされた**」ということ。

すべてを失った牢獄で、サムソンは主の恵みを味わい知ったことだろう。

■**罪を悔らず、自分の弱さを自覚しよう**。弱さを思い知らされた者こそ、共に働いてくださる主の、計り知れない恵みを知ることができるから。

■**力に溺れたサムソンは神の相続地を離れた**。しかし、私たちは、**キリストの体なる群れに、兄弟姉妹に、しっかりとつながっていよう**。

■**主に信頼しよう**。私たちは、決して、一人で信仰を守り通すことはできない。だから主は、人となって世に来られた。だから主は、信じる者を宮として、私たちの内に住んでくださるのだから。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

わたしは、サムソンのように、弱(よわ)い者(もの)です。

ただ主への信仰(しんこう)によって、弱い時にこそ、強い者としてください。

自分自身(じぶんじしん)の心の貧(まず)しさを思い知らされます。

ただ、主を慕(した)い求(もと)めます。

主の目に、幸(さいわ)いなものと変(か)えてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」